

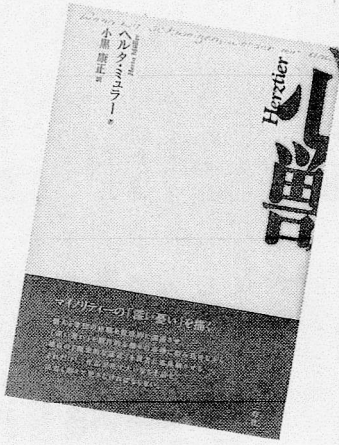
H・ミュラー著『心獣』(三修社)を読む

▼ヘルタ・ミュラー著
小黒康正訳『心獣』7
15刊 四六判三一〇頁・
本体二四〇〇円・三修
社

終わらない過去を
静かに告発する

心を重くするような、暗い光景の連続

松永美穂



二〇〇九年にノーベル賞を
受賞したルー・マニア出身のド
イツ語作家ヘルタ・ミュラー
の二作目の長編小説が邦訳さ
れた。原書が出たのは一九九
四年だから、二〇年の歳月を
経て日本で紹介されたことに
なる。しかし、その内容は古
びてはいない。むしろ、特定
秘密保護法の施行が近づき、
政権に反対する発言や集会に

対して自治体が規制をかける
ケースが増えているように見
える日本社会において、この
本に描かれたような社会はけ
っして縁遠い話ではないと思
いながら読んだ。

「私」は自分のトランクに、
自殺の直前にローラが隠した
ノートを見つけた。ここで、
それまで私がローラのノー
トから引用していた言葉は、
ローラの死後になって読んだ
ものだったのだ、とわかる。
ローラの話の途中に「私」
の家族のエピソードが挟み込
まれたりして、物語がどこへ
向かっているのか、最初はわ
かりにくい。しかし、社会主
義時代のルー・マニアの、相互
監視と密告、秘密警察による
嫌がらせの数々が、次第に鮮
明な像を結ぶようになる。著
者の体験に基づくこのような
話は、ノンフィクションの形
で具体的に書くことも、もち
ろん可能だろう。しかしミュ
ラーは独自の詩的な言語で、
時間を行きつ戻りつさせなが

ら、社会主義下の人間模様を
紡ぎ出していく。
文章の特徴の一つは、体言
止めの多さだ。「自分を通り
の端にしっかりと引き留めて
おいた私」。「不安を抱きなが
ら家にいた男たち」。述語で
なく名詞で止められること
で、人々の姿が前面に押し出
されてくる。ただ、人々は往々
にして固有名を持たない。た
とえば学生寮で同室だった娘
たちも、ローラ以外は名指さ
れることがないのだ。名前の
ある登場人物は、自殺するロ
ーラ、ローラの死をきっかけ
に「私」と出会うエトガル、
クルト、ゲオルク、下宿先の
マルギット夫人、工場同僚
テレザ、そして秘密警察の
側にいる大尉ビュレなど、
少数にすぎない。名前を持つ

人物についてのスケッチもあ
くまで断片的だが、断片の反
復により(たとえばビュレ
による尋問の場面)クロテス
クに歪められていく姿形が、
逆に強いインパクトを残す。
監視社会では、手紙はいつ
開封されるかわからない。荷
物も勝手に検査される可能性
がある。誰かが開いたかどう
かを知るために、わざと封筒
に髪の毛を同封したり、トラ
ンクの上に髪の毛を置いたり
する話は象徴的だ。体制に順
応しない者は抑圧され、職を
喪失、孤立させられる。「私」
の動き、つなぎ止めることの
難しい命。本書の語り手は悲
しみで満たされながら、終わ
らない過去を静かに告発して
いる。
(ドイツ文学)